

# 柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第145号

草創期の  
柿生中学校 - 11

## 下駄切坂と柿生隧道の建設

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆通学路◆ 柿生中学校の誕生当時、現在の真福寺から中学校の下を通過して、柿生駅方向へ抜ける道路はありませんでした。王禅寺や早野の生徒たちは、谷戸や尾根伝いの道を通り、さらに真福寺から麻生台団地にかけて、柿生中学校や柿生駅方面への通行を遮っている山越えをしなければならなかったのです。山には、丸太で細い階段が付けられていましたが、雨や雪が降ればグチャグチャの泥んこ道になる、急峻な坂道がありました。踏ん張ると良く下駄の鼻緒が切れてしまったために、誰もが下駄切坂と呼んでいた道でした

戦後は、東柿生小学校が1947(昭和22)年に開校しましたから、小学生は柿生小学校に通う必要はなくなりましたが、戦前・戦中の下麻生分校は4年生までで、5,6年生と高等科の生徒は、下駄切坂を超えて本校まで通っていたのです。王禅寺のはずれ日吉谷戸の生徒達は、今の王禅寺中央小・中学校辺を通過していた細い尾根道を通ったり、白山神社に抜ける尾根道を通って、真福寺に出て、また下駄切坂を上るのです。途中で野ウサギなどを見かけると、勉強道具を投げ捨ててウサギ狩りに熱中して、いつしか学校へ行く気をなくすなどということもあったのです。適当に弁当を食べ、帰りは女の子たちが通るのを見送り、「頃や良し」と何食わぬ顔で帰ったのですが、女の子が学校からの連絡を伝えに家に寄り、学校をサボったことは露見していて、大目玉を食らったことが何度もあると、古老の方々が話して下さいました。中学生たちは、もう少し大人ですし、家の手伝いをしなければならないことも理解していましたから、ずる休みはしなかったようですが、下駄切坂を越えての通学が大変なことに変わりはありません。生徒たちばかりでなく、仕事で柿生駅に或いは上麻生や片平方向に出なければならない大人たちも、買い物に出る婦人たちも、歩きやすく広い道路の建設を願う気持ちは一緒でした。とりわけ、自分たちの集落を「まるで袋小路だ」などと称していた真福寺の人たちの願いは切実でした。



柿生隧道の掘削工事 勤労奉仕中の  
真福寺の皆さん(1944年5月8日)

実は、下駄切坂をトンネルで抜ける道路を建設し、柿生市街地から陸の孤島となっている真福寺、王禅寺、早野との行き来を楽にするプランは、戦中から存在していました。現実に真福寺の信号から、しばらく先まで道路が整備され、1944(昭和19)年には、軍部の了解の下、上麻生側に向けトンネル掘削工事が始められたのです。戦時中で若者はほとんど従軍していましたから、真福寺、王禅寺、早野、下麻生の4集落の大人たちが、日替わりで労力を提供し、つるはしにモッコを担いで、まさに手掘りに近い形で掘り進めたのです。しかし残念ながらこの時の工事は完成に至らず、戦局が一段と悪化したために、中断のやむなきに至りました。

1945(昭和20)年、ポツダム宣言を受諾して戦争は終結。GHQの占領下にあった1949(昭和24)年に、中断していたトンネル建設が話題に上り、財政難の中、負担のかなりの部分を地元で受け入れることで話がまとまり、上麻生側の道路敷地の負担分については、トンネルの恩恵が大きい真福寺が白山神社の山林の一部を代替地として提供することで、話がまとまったのです。こうして上麻生側からは土木会社の堀一組が、真福寺側からは前記4集落の労力奉仕で掘り進め、途中、高低差がでるといふハプニングを挟んで、1951(昭和26)年9月に、ようやくにして川崎市内唯一のトンネル、距離にして60.1mの「柿生隧道」(命名 金刺川崎市長)が完成したのです。当時1年生だった6期生は、「急峻で雨でぬかるんだ下駄切坂を通るのが嫌だった。滑って転んで骨折した友人もいた。下駄切坂を通らずに学校に行けるので、通学がとても楽になった」と、喜びを語ってくれました。(続く)



完成した柿生隧道  
真福寺側からの渡り初め

鶴見川流域の中世  
その5

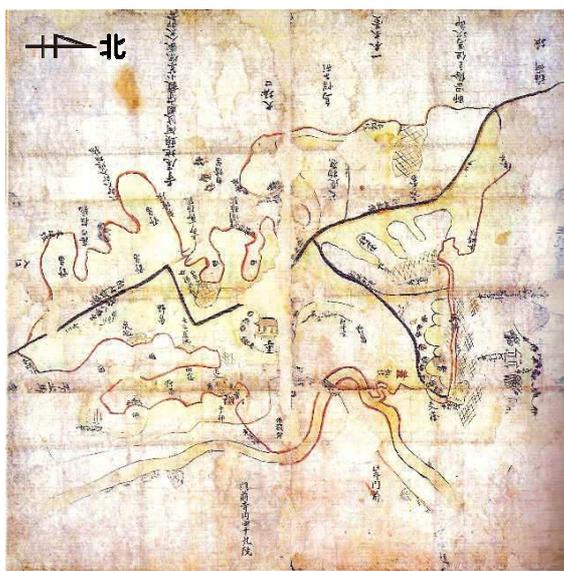
## 中世人の生活の舞台としての鶴見川 (5)

## ◆「鶴見寺尾絵図」1◆

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

神奈川県立金沢文庫の展示室を入ると正面に墨と朱色で描かれた「鶴見寺尾絵図」が掛っている。この絵図は南北朝時代の鶴見川下流域の様子を描く極めて貴重な絵画資料で、建武元年(1334)に起こった土地をめぐる訴訟に関連して描かれた相論絵図と言われている。

絵図には中央に「寺」が大きく描かれて、「寺」の下方には蛇行する鶴見川や川を渡る鎌倉下道が描かれている。「寺」を広く囲むように朱色の細い線で書かれた本境・本境堀が描かれている。朱線で記された本境こそが、この「寺」の主が本来の所領であることを主張するために描かせた絵図であるとみてよい。絵図の右斜め上から左下に向けて太い黒線が走り、「寺」の左側に描かれた馬水飲谷で鍵の手に折れてさらに左下に伸びている。その黒線の先には子安郷の入江の海岸に達している。また、黒線の中ほどの犬追物原から右下に向けて別の太い黒線が斜めに走っている。この黒線の先は鶴見



神奈川県立金沢文庫所蔵「鶴見寺尾絵図」

川の川岸まで伸びている。二本の黒線は朱線で記した本境を越えて鶴見寺尾郷を3分割しているようである。それぞれの黒線には3か所にわたり新境押領の文字が記されている事もそれを裏付けている。

絵図上方には寺尾地頭阿波國守護小笠原蔵人太郎入道、同じく上方右側には師岡給主但馬次郎、右側の鶴見川付近には末吉領主三嶋東大夫とある。小笠原蔵人太郎入道長義は甲斐源氏小笠原氏の一族で、祖父の長房以来阿波守護職を相伝している。三嶋東大夫は源頼朝が崇敬した伊豆三島大社の神主家の当主であり、いずれも鎌倉幕府の有力者である。

中央に描かれた「寺」には領主の記事がないが、この絵図の裏書には「正統庵領鶴見寺尾圖」とあるので鎌倉の建長寺塔頭正統庵が領主である。すると中央に描かれた「寺」は正統庵が現地を支配する拠点とした政所であろう。小笠原蔵人太郎入道長義と三嶋東大夫は本境を越えて正統庵領鶴見寺尾郷を侵食したのである。

絵図の描かれている範囲を現在の地図に落とすと東は横浜市鶴見区市場下町、北は同下末吉一帯、北西は同区馬場一帯、南西は神奈川区入江町までの鶴見区の大部分と神奈川区の一部を含む広い範囲である。加えて絵図に書かれた新境押領線・馬水飲谷・犬追物原や白幡宮・小池堂などの宗教施設や谷戸田・野畠・溜池などの景観が現地で確認できる事もあり、絵図に描かれた現地を歩くと、丸々3日間掛けてもまだ足りないほどである。

40年前に明治大学の高島緑雄先生の鶴見寺尾郷調査に同行させてもらって以来、幾度も足を運んでいるがそのなかで印象に残った所を挙げてみたい。絵図にある白幡宮は東寺尾町の白幡神社で、低地に張り出した台地の中央部に位置して周囲を見渡すことができる。この台地を囲むように西・北・東側の3方から入江川に注ぐ谷戸が入り込んでいる。絵図には五郎三郎掘籠・性圓掘籠・□郎掘籠と記された谷戸田がこれにあたる。この付近には湧水があり、白幡神社から谷戸を隔てた宝蔵院の崖からは今も豊富な湧水が流れ出ている。五郎三郎掘籠の背後は馬水飲谷が描かれているが、これは国道1号線のバス停荒立に比定される。江戸湾交通と鎌倉下道の結節点である鶴見には、物資の輸送に不可欠な多数の馬が飼われていた。馬水飲谷はそうした馬の給水や休憩場所の役割を果たしていたと考えられる。

話を白幡神社の北東の台地には転じると、殿谷公園には絵図が描かれてから約百数十年後に築かれた寺尾城址があり発掘調査によって土塁・空堀・中世墓や板碑等が出土している。殿谷公園の北に□郎掘籠の谷戸田が入り込んでいる。この谷戸の背後にある台地が絵図に記された犬追物原がある。この辺りで武士達が馬場に犬を放ち騎馬で追いかけて墓目矢で射掛る犬追物を行ったのであろう。地名もそれに因むかのように馬場である。付近には鶴見配水塔が建ち東には尾根道が下末吉方面に伸びて、尾根道からは北方に三ツ池を望むことができる。絵図に「新境押領」と記された太い黒線がこの尾根道である。

【訂正】 鶴見川流域の中世その2(第142号) 下から3行目 建武元年(1333)→(1334) (つづく)

シリーズ  
教育の歩み 第3部

## 日本の学校と教育(1)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆はじめに◆

第2部では、イギリスを中心に義務教育の形成過程と、それに伴う学級制の誕生を辿ってきました。義務教育の普及は、教育を受ける側の学習意欲の一定の高まりを背景としながらも、学習意欲の有無に関係なく、一定年齢の子ども達を全員学校に集めるという、供給先行型で実現したものでした。

通常の組織は、需要を予測して編成され、うまく需要を掴むことに成功すると成長し、掴みそこなうと淘汰整理されてゆきます。しかし、学校にはこうした競争は存在しません。学校は、教育を受ける側の子ども達のニーズに無関係に存在し、学習意欲のない子ども達にも就学を強制します。そしてまさにそのために、教室の秩序を維持する必要が生じ、子ども達に厳格な行動規範を科すこととなります。子ども達は、入学当初から規律に従うことを強いられます。

こういう学校組織が、全国規模の学校網を作り上げるには、国家の力が必要でした。義務教育制度の確立は、国家の教育への関与なしには、不可能だったのです。一方で、国家が義務教育という仕組みを構想することが可能となるためには、子ども達を集めて教育しようとする、いくつかの先行的な試みの存在が必要でした。それが、イギリスでは内外学校協会や国民協会が作り出した学校の存在でした。そしてフランスではカトリック教会による、ドイツやオランダではプロテスタントによる子ども達の教化のための学校の存在でした。

こうした学校は、子ども達の教育に対する、とりわけ読み書きに対するニーズの高まりを背景としていましたが、より直接的には、宗教改革後のカトリックとプロテスタントの勢力争いを背景としていました。フランスのカトリックは、プロテスタントの隆盛に対する失地回復を目指して教会を通じた教育に力を入れ、イギリスやドイツのプロテスタントもまた、読み書きを通じての宗教教育に力を入れたからです。こうして各地に誕生した慈善学校は、やがて日曜学校となり、そこから第2部に記したような学校システム(=モニトリアル・システム)に行きつき、やがて組織化され、効率化された学校システムが出来上がったのです。

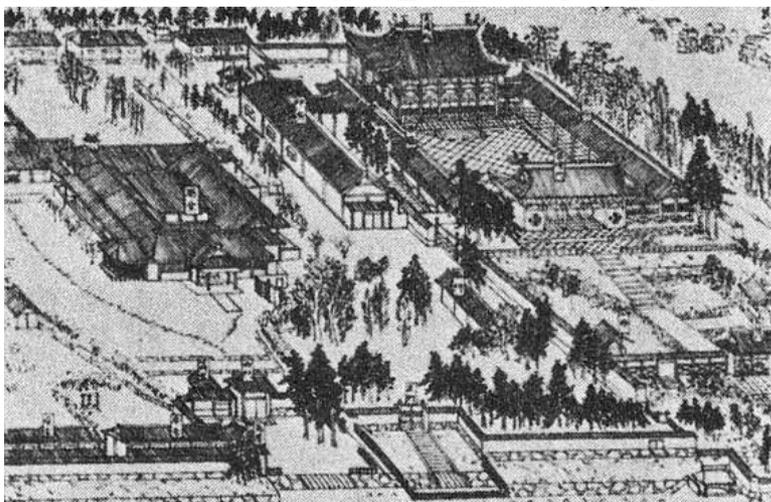
こうして誕生した義務教育は、学習意欲と無関係に、一定年齢の子ども達を学級や学校という箱の中に放り込みます。学校は需要と無関係に存在します。学校は、需要者である個々の子ども達のリズムに合わせることはせず、システムとしての学校のリズムに、子ども達が合わせることを要求するのです。こうした学校に、子ども達を続けて通わせるためには、学校自身も少しは子ども達に魅力ある存在に、自らを変えていく必要がありました。需要が弱い以上、学校自らも努力して需要を生み出す必要に迫られたからです。こうして編み出されたのが、競争を促す集団として、クラスを編成することでした。モニトリアル・システムは、同一能力によって均質化されたクラスという人為的な集団を造り、賞罰制度によって子ども達のやる気を引き出しました。競争の勝者に用意された賞品と名誉とが、生徒の学習意欲を刺激したのです。読み書きそして計算(ソロバン)という知識の習得に、賞品と名誉という付加価値を加えて、学習意欲を強く刺激する方法が開発されたのです。

学級制はこのようにして誕生しました。授業の成立に不必要な物や人物はすべて排除され、学習活動に無縁な活動が入り込むことにも、制限が加えられたのです。こうして同一年齢、同一教員による同一授業、同一空間、同一時間等々、全てが同一化された環境の下に、子ども達は置かれたのです。

幕末の動乱を経て誕生した、近代日本(=明治国家)は、近代ヨーロッパが産み出した教育制度を、欧化主義の名の下に、丸ごと導入することを目指しました。良く知られているように、日本の義務教育は、1872(明治5)年の学制によって、4年制の初等教育の方向が示され、1879(明治12)年の教育令で、4年間に16ヶ月の就学が義務付けられました。

日本の近代教育は、どのような曲折を経て定着していったのか。徳川幕府の下での日本の教育との折り合いは、どのようにつけられていったのか。しばしお付き合いいただくと幸いです。

(続く)



江戸時代の最高学府 昌平坂学問所(寛政年間の鳥観図)

**王禅寺の子年観音御開帳が短縮終了**

今年の子年に当たり、子年観音で親しまれている王禅寺のご本尊「聖観世音菩薩」の12年に一度の御開帳が4月1日から5月6日の予定で行われました。しかし折悪しく新型コロナウイルス拡散に伴う緊急事態宣言のありを受け、19日で終了となってしまいました。企画されていた三十三所霊場巡りのバスツアーも中止となり、さらに感染拡大防止のため堂内参拝や境内での接待も中止され、やや寂しいものとなりました。一方で散歩がてらの家族連れの方々など新たな参拝者が増えたとのことで、最終日まで手を合わせる方が絶えませんでした。12年に一度で認識を新たにされた方、御朱印を頂く熱心な方も多く、地域文化の面からも有意義な御開帳であったのではないのでしょうか。

12年後には本来の姿の充実した御開帳が期待されます。

**柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】**

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**5月**

(緊急事態宣言延長により)休館

**6月**

13・20・27日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

(6月6日は休館です)

**第84回  
カルチャーセミナー****秩父流平氏 畠山重忠と稲毛重成  
～その鉄並びに杉山神社とのかかわりを追う～**

東国の鍛冶棟梁と言われる秩父氏の嫡流 畠山重忠と彼の従兄弟 稲毛重成。この二人の鉄とのかかわりを確認し、さらに杉山神社との接点を探ります。

杉山神社の分布範囲は、秩父流平氏の勢力分布と驚くほど重なっており、杉山神社解明の新たな糸口からのアプローチです。

日時 : 未定 (4月25日の予定でしたが、無期限延期となっています)

講師 : 岡田誠治氏 (麻生歴史の会副委員長)

会場 : 柿生郷土史料館特別展示室

**第18回 特別企画展****続 戦中・戦後の教科書展**

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つかった戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

期間 6月13日(土) ～ 8月29日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室